



2004年度 ポストドクター個人研究課題成果報告

(研究概要) 「日本を中心とした宗教と芸能の相関的研究」

齊藤利彦

2004年4月より、アジア宗教文化情報研究所ポストドクターに採用され、現在、研究所の第一・第二研究成果展示室や宗教文化シアター、その他の研究業務に従事しています。

また、2004年度ポストドクター個人研究課題として「日本を中心とした宗教と芸能の相関的研究」という研究テーマを設定し、以下の2点を解明することを研究目的としました。

- (I) 宗教や信仰と、芸能との具体的な関係を明らかにすることによって、芸能のもつ特質や根源的な意義を解明する。
- (II) その研究成果を通じて、芸能と宗教や信仰、あるいは寺社などの関係を正しく解明・理解するとともに、宗教や信仰の構造を認識する新たな研究視覚を提示する。

以上のような研究目的を究明していくために、つぎの2点を、具体的な研究課題としました。

- ◇ 宗教や信仰の展開に果たした芸能の役割とその機能。
- ◇ 芸能者が寄せた信仰とその特質・実態。

具体的な考察対象としては、中世末から近世初頭に各地を廻り「説経」を語って人々より喜捨を乞うた放浪芸能者、「ささら説経」(説教者、説教、説教のものとも称された)としました。

ささら説経に関する研究は、彼らが語った「説経」を中心とした諸先学の研究成果、佛教芸能の観点から、彼らささら説経と「説経」を考察された本学名誉教授で当研究所兼任研究員の関山和夫先生のご業績などの研究蓄積があり、また筆者も一部究明を

行っています。これらの研究成果をふまえながら、以下の点を明らかにしました。

- (1) ささら説経たちが信仰を寄せた関清水蟬丸宮の概略と彼らとの関係。
- (2) 近世初頭、社内でささら説経を支配した「兵侍家」について。
 - ① 彼らの由緒・伝承を考察し、彼らが関寺門前に集した非人層などの系譜を引くものと考えられる点。
 - ② 彼らの神事社役の具体的な内容。
 - ③ ②の研究成果により、彼らが社内の下級神職を担っていたこと。
- (3) 兵侍家のささら説経支配について。

これらの研究内容・成果については、研究所研究紀要創刊号に「関清水蟬丸宮と兵侍家」と題する論文を掲載しました。ご笑覧いただきましたら幸いです。

今後は、三井寺による兵侍家追放の経緯とその理由、三井寺によるささら説経の組織編制、地域社会に定住したささら説経の具体像について考察していく予定です。

なお、本年度の他の研究成果としては、「第三章 近世の芸能」「第四章 近代の展開」(『日本芸能の環境』京都造形芸術大学通信教育部)、「一切経と芸能—平等院一切経会と舞楽を中心に—」(『佛教学総合研究所紀要別冊 一切経の歴史的研究』)、「近世中期界の鑑町芝居について」(『鷹陵家学』30号)、「芳沢あやめ代々とその墓碑—二代目・三代目・五代目を中心に—」(『八尾市立歴史民俗資料館研究紀要』16号)があります。合わせてご高覧ください。



2004年度 ポストドクター個人研究課題成果報告

(研究概要) 平等院鳳凰堂阿弥陀如来像について

近藤 謙

平安時代後期を代表する仏師定朝は、平等院鳳凰堂本尊阿弥陀如来像の作家として広く知られています。しかし彼の作り上げた作風が何故、時代を風靡するほどの評価を得たのかは、いまだ解明されていま

せん。太田博太郎氏が指摘されるように、平等院鳳凰堂自体も、それまでの寺院と比較して特異な仏像の安置方法をとっています。すなわち比較的小さな堂宇の中に丈六仏を一体安置するという構成は、平

等院以前には寺院内の小さな堂宇でなければありえなかったと言われています。平安後期に現れた特異な伽藍としては、藤原道長の法成寺に始まる九体阿弥陀堂が知られています。鳳凰堂は堂内の全ての構成物が本尊である阿弥陀如来像一体に集中しているという点が非常に特徴的です。堂内の雲中供養菩薩像や九品来迎を描いた扉絵は、やはり法成寺に先例がありますが、同寺が柱絵に曼荼羅の諸尊を描いていたと伝えられる事に対し、鳳凰堂は唐草より天人や鳥が化生する浄土の光景を現している点が大きくことなります。平等院を模したとされる後の鳥羽勝光明院や平泉・中尊寺金色堂、日野・法界寺阿弥陀堂などがいずれも柱絵に曼荼羅をあしらい、仏像と絵画が一つの密教空間として有機的な関係を構成していることと比較すると、鳳凰堂内部の空間は目に見える形で阿弥陀浄土の場景を形象化することが優先されていると言えるでしょう。

一方でよく知られているように、本尊阿弥陀像の胎内には密教の本尊観を行うための月輪が納入され、雲中供養菩薩からも曼荼羅中の尊名が発見されています。従来平安時代浄土教美術の粋と位置づけられる鳳凰堂ですが、平安貴族にとってなじみ深かった密教信仰を基盤としていることも注目されるべきでしょう。このことから、鳳凰堂とその内部空間には二つの意味が包含されていることに気づかされます。一つは視覚上に顕著に訴えかけてくる、仏像・堂内空間・建築その他周囲の風景まで取り込んだ阿弥陀浄土の形象化という意図。今ひとつはその奥に隠された目に見えない密厳浄土としての姿。後者は外見上は隠されているため、まさに奥義を知るものだけが理解しうる真の姿として位置づけられているかのようです。

鳳凰堂のこのような構成は誰によって企画されたのでしょうか。撰閔期の寺院造営の過程は詳細を知りませんが、院政期においては施主が積極的に造営プランやデザインの細部にいたるまで関与し、安置仏や堂宇に関してもしばしば実地に検分し、場合によっては修正を命じていることが知られています。仏師や大工は施主の意向を第一に優先しており、完成した仏像や堂宇にはそれがかなり忠実に反映されていたと考えられます。とするならば、従来になく平等院の造営プランに関して施主たる藤原頼通の意向が大きく反映されていると考えるべきでしょう。堂宇の形式や雲中供養菩薩像に関しては、先にあげた法成寺や奈良時代の堂内荘厳を参考にした可能性が指摘されていますが、それらを統合して鳳凰堂という一つのプランを作り上げたのは頼通であったとみてよいでしょう。それでは堂内の中心に

阿弥陀像一体を安置するという前例のない構成も、彼の計画であったと考えられます。

彼が参考にした撰閔期の阿弥陀信仰の典拠としては有名な『往生要集』の他、近年では天台の碩学・皇慶が著した『阿弥陀私記』の存在が注目されています。特に後者は仏師定朝のために皇慶が編集した内容を伝えているとされており、鳳凰堂との関連が予想されます。頼通のアドヴァイザーであり平等院の初代執印に迎えられた園城寺の明尊が、なんらかの助言を行った可能性も考えられましょう。しかしいずれにせよ、『往生要集』『阿弥陀私記』のいずれか一方に忠実に従った造営プランではなかったと考えられており、特に阿弥陀一体を本尊に据える安置仏構成は何に基づいたものか判明していません。強いて推測すれば近年指摘されているように、『観無量寿経』の観想法を密教の本尊観として用い、とくに阿弥陀如来単体の観想を主目的にした安置構成だといえるでしょう。

さらにもう1点、鳳凰堂像によって代表される定朝様の如来像が院政期にいたって「仏の本様」と呼ばれるほどの位置づけを得たという問題があります。平安貴族の日記には、11世紀以降仏像・仏画に関する美的評語が見られるようになりますが、定朝作の仏像は常に造仏の典拠とされていました。これ以前の時代に特定の仏像が繰り返し模倣されるという傾向はみられませんでした。平安後期にのみ、なぜこのような仏像観が成立したのでしょうか。一つの可能性として、観想の補助として仏像・仏画の役割を重視した密教信仰と、さらにそこにみめよき仏像を用いることの有用性を理論づけた『往生要集』の流布が、大きな裏づけを与えていることが考えられるでしょう。さらに院政期の史料では、すぐれた仏像は「法丈六」と呼ばれる像高約280センチのサイズを持っていたことが知られています。実際に現存する優れた定朝様の丈六如来像はこのサイズで造られていることが指摘されています。当時丈六仏の造立は、往生を目的とした作善として高い有効性を持つことがとかれていましたので、すぐれた作風をもつとされた定朝様仏像を丈六で作ることは非常な功德と観念されていたようです。さらに仏の姿を幻視する「見仏」という現象がやはり祥瑞として重視されたことも考慮されるべきでしょう。以上のような諸要素が、既に形成されつつあった仏像に対する美的基準に強く作用し、見仏来迎の対象として観想するにふさわしい、美的にすぐれた仏像を求める強い要求となり、急速に作風の洗練が進められたのではないのでしょうか。

道長・頼通の時代は、京において定朝とその師で

ある康尚によって、寺社に属さない専門的造仏工房が発生した時期に該当します。京以外の各地にも寺社に隷属する造仏工房は存在していましたが、それらの現存作例からすると、定朝様の仏像は美的洗練という意味において一頭他を抜いています。この時期、京周辺で宮廷貴顕の高度な要求を受け入れ、それを作風に反映しうる仏師工房は、康尚・定朝の工房しかなかったことでしょう。彼らは師弟二代にわたって、さながら摂関家の専属工房であるかのようによくの造仏を手がけています。この間に宮廷貴顕の求める仏像の理想形が具体化され、定朝によってそれが一つの形式として大成されたのではないで

しょうか。以後、定朝様の仏像は京城を超えて各地に伝播していき、また宮廷貴顕の間では繰り返し定朝様の再現が求められますが、それは単なる模倣の繰り返しではなく、理想とする仏像の姿を明確にいただき、積極的に作風を練磨させていく過程であったと捉えることができるでしょう。「仏の本様」と位置づけられた定朝様仏像は、このような諸要因によって、平安宮廷貴顕と僧、仏師という、受けてと造り手とアドヴァイザーである三者が造り上げたものであり、平安後期でなければ登場し得ない作例群であったといえるでしょう。

常設展について

現在本研究所では来年の本格オープンに向けて、展示室の環境調整を行っております。このため木製品・文書類などの展示には制限がありますが、発掘調査や民俗調査による収集品、寄託いただきました資料の中から貴重な文化財を収蔵展示いたしております。また展示物に関しましても随時展示替えを予定しています。環境調整が終了しましたあかつきには、指定文化財の展示公開も意欲的に行っていきたいと考えております。

第一展示室

第一展示室では、漢字文化圏の文化・宗教活動に関して本研究所兼担研究員の研究成果を随時公開して参ります。現在は佛教大学がこれまでに調査・収集を行った資料の一部を公開しています。またご寄託いただきました文化財に関しましても、所蔵者のご了解を頂戴し展示・公開しています。そのほか今年度は、中国・新疆ウイグル自治区のオアシス都市遺跡ダンダンウイリクより発見された貴重な壁画に関する発掘調査経過説明の他、国際シンポジウムに関連してチベット系仏教美術の諸様式に関する紹介展示などを予定しています。

第二展示室

第二展示室では、現在佛教大学の学史を展示いたしております。明治元年(1868)、知恩院の山内・源光院に設置された仏教の教育・研究機関に発し、昭和24年(1949)、大学へと改組され、現在に至る約1世紀半の歴史を所蔵資料を通してご覧いただけます。また将来はパネル展などを行うミニ・ギャラリーとしても活用したいと考えております。